

二十四人の唐傘

南部町境

絵：野口宣友



むかし昔、市場で裕福な旦那と貧乏な男が偶然知り合いました。

旦那が「わしの住んでる所は、『境』と言って、海のあるところだ」と言つと、男は「おらが所は、へるりと山に囲まれておつて、『境』と言つとるんじや」と言います。「ほう、境と境か、なにかの縁だな」と話を続けていると、「山の『境』からは大山の綺麗な姿が毎日拝まれるんじや、いつもお日様がさんさんとして、明るさが枝葉となつて『境』を照らすんで、『明枝』とよんじよる」「海の『境』も大通りを『中』ちゆつて、枝線に別れた小道を『中枝通り』とゆうとる」など、似通つた所が多くあります。

そんな話をしていると、海のある『境』に住む旦那が「うちには宝が山のようにあつてな、宝の蔵がなんぼでも建つてるだ」と言い出しました。一方、山に囲まれた『境』に住む男は「うらやまげな話だが、おらが家はどえらい貧乏で、人に自慢するよふな宝物はなんもないが、たった一人に負

けんもんがあるだ」と言います。旦那は「一つでもさういうもんがあるなら結構だ。そげならその宝物とうちの宝物を持ち寄つて宝くらべしようじやないか」と言い出し、2人は宝くらべをすることにになりました。

そして宝くらべの日、海の『境』に住む旦那は、大勢の番頭や店子やらを使って、馬車できょうさんなたぐさんの宝物を運ばせて、立派な宝物をずらりと並べてみせました。ところが山の『境』の男は姿を見せません。「どげんしたとどかいな、来んじやないか。わしに恐れをなしたか」と旦那は得意満面です。

そこへ、24人の子どもを引き連れて男が現れました。子ども達は皆、唐傘を一本ずつ持つて、小さな子から順に男の子や女の子が列を作つて並びました。「これがうちの宝じや、人に自慢できるもんは、これより他にないですだ」と男が申し訳なさそうに謝つていて、急に雲行きが怪しくなつて、黒い雲とともに夕立が激しく降り始め

ました。

旦那は大慌てで並べた壺や掛け軸、鎧などを片付けましたが、とつとつ間に合わず、宝物を濡らしてしまいました。

一方、男は持つてきた唐傘を綺麗に並べて子ども達に差させると、涼しい顔で帰つて行きます。その様子はまるで歌舞伎の白波五人男の行列のように見事なもので、見物人からも割れんばかりの拍手が鳴り響きました。

これを見た旦那は「どれ程宝の山があつても、子に勝るまはない。こりゃあわしの負けだ」といいました。こうして『子宝』という言葉が使われるようになったそうです。

ところで、なぜ男は子ども達の唐傘を用意できたのでしよう。

男が言うには「つばめが低く飛ぶのを見て、子ども達に傘を持たせただ」といひつてます。

雨が降る時、虫は雨が降るのを察知して、草むらや影のある低いところに身を隠すので、虫を餌にするつばめも低い所を飛ぶようになるのです。おしまい